

「高線量 無人の街」

表題は中日新聞 9 月 19 日「特報」のタイトルである。福島県の浜通りを縦断する国道 6 号線の富岡町－双葉町間の交通規制が 15 日に解除された。3 年半ぶりに全通した国道を車で往復したルポである。

写真①は福島第 1 原発方向に向かう作業員らの乗ったマイクロバス、②は双葉町の「原子力明るい未来のエネルギー」の看板、③朽ちたコンビニの跡、④民家への侵入を防ぐバリケードである。

②の標語を小学 6 年の時に考案した大沼勇治さん(38)は、規制解除の当日、避難先の茨城県古河市から現場へ足を運んだ。看板を写真に収める人々を目にして複雑な心境になったという。大沼さんは語る。国道 6 号の規制解除は、「一般車両にとっては確かに便利になった。けれど、本当の目的は復興に見せかけた汚染ごみの運搬ルートの確保と思わざるを得ない。」

侵入を防ぐバリケードは沿道に約 3 百カ所。「バリケードは、東電とともに歩んだ私の人生に付けられた×印に見えた。そして、6 号は今後、人が住める側と住めない側とに、町を分断する象徴になった」

大沼夫妻のことは、テレビのドキュメンタリーで見たことがある。確か親戚のある愛知県安城市に移った頃、双葉町に通う二人を追った番組であった。講義でも映像を流したことがある。下の写真は『週刊金曜日』2014 年 9 月 12 日号に掲載された大沼さん提供の一枚である。ルポライターの鎌田慧さんが「原発推進標語をつくった少年の 26 年」というルポで二人を詳しく紹介している。

大沼さんは月 1 回、古河市から、双葉町の自宅へ一時帰宅する。そのたびに、見事に裏切られた少年時代の夢を、いまだに刻んだまま立ち尽くしている巨大なアーチにむかってあるく。その無念さの抗議の繰り返しは、内向する悔しさを撥ねのける決起でもある。「原子力破滅未来のエネルギー」「原子力制御できないエネルギー」「原子力暗い未来のエネルギー」

大沼さんの新しい標語。 「脱原発明るい未来のエネルギー」

「核廃絶明るい未来のエネルギー」



(2014 年 9 月 21 日)